

Rio

リオ
豊田市矢作川研究所 月報

CONTENTS

- 下流域の魅力と問題点
- 抹茶が飲めた川
- 古巣水辺公園における
鳥類の河川利用とその重要度について
- 今月の一枚
- 第2回 かいぼり大会
- 研究所の調査風景

2003 November
No.67

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/> yahagi/index.html e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

*Rioはホームページ上でもご覧になれます

下流域の魅力と問題点

阿部夏丸

豊田市を流れる矢作川は、水源ダムを境に上流域と下流域とに分かれる。私はその下流域で育った。下流域はアユ釣り場も少なく、注目度も少ない。私が、漁協に対して「アユしか見ていない」と、いやみを言うのは、下流に住む者の、ひがみかもしれない。

下流域の魅力は、何とんでも、生き物の種類の豊富さにある。上流にはほとんどいないカジカ、シマヨシノボリ、スミウキゴリ、ヌマチチブ、ミナミテナガエビなどもいる。また、モクスガニも多いし、ボウズハゼやカワアナゴなんて珍しい物も見かける。これらはすべて海から遡上してくる生き物で、水源ダムから海までの35キロに大きな堰がないことが幸いしている。

下流域に多いこれらの雑魚は、川の豊かさのバロメーターであり、子供のよき遊び相手なので大切にしたいものだ。

では、なぜ、水源から上流にいないのか。理由は簡単。ダムがあるからである。確かに魚道はあるのだが、現在の魚道は、アユや大魚が上れるだけで、底物雑魚には流れがきつい。傾斜が緩やかなら、テナガエビなどは岸辺を歩いてでも登るのだ。昔は彼らも上流域に登っていたはず。ぜひ、魚道を見



カジカ



シマヨシノボリ



モクスガニ

直してほしい。

下流の雑魚を上流に行かせたいと思う理由は、他にもある。下流の環境がやせ細っているのだ。まず一つに水不足。これはたびたび問題になるのだが、遡上する魚にとって水量は欠かせない。さらに問題なのが、一日に頻繁に行われるダムの開け閉め。魚は雨による水量の増減は察知できるが、人間の都合は察知できない。

浅瀬で産卵するオイカワを観察していたら、いきなりダムを閉められ、産卵床が干上がるのを見たことがある。10センチの水位が、大量の魚の命を奪うことになるのだ。

そして、砂不足。水源下流は砂川だが、数あるダムと過去に行われた浚渫のせいで、深刻な砂不足に陥っている。川底は30年で4メートル以上も下がり、橋の上からは見えないが、川に入ると流芯は、所々、粘土層が露出している。困ったことに、一旦、粘土層が露出すると、摩擦がないため砂は流され、もう、そこには砂がかぶらない。さらに、富栄養化で河原に根付いた木々が原因となり、川の流れは、糊付けされてしまった。

以前の矢作川は、大水の度に流れの位置を変えていたのだが、今では変わる

ことがない。水は同じ場所ばかりを削り続けている。そのため、雑魚の産卵場であり、ゆりかごだったはずの浅瀬やワンドは減ってしまった。

私はただの「川遊び人」で、専門家ではないが、橋から矢作川を見下ろし、思うことがある。この広い河原に、人の手でワンドと浅い小川を作れないだろうか。川の中に小川を作るわけだ。本来、川には多くの支流があり、それが雑魚の命を育み、川で遊ぶ子供を

育ててきた。しかし、支流はコンクリートの用水路となり、復元には問題が多い。ならば、川の中に小川を作り、雑魚が育ち、子供が安全に遊べる空間を作れないものだろうか。もちろん、コンクリートなど張らず、大水で潰れたら作り直せばいい。それには、まず、「川遊びの権利」を主張できる市民と、柔軟な頭を持つ行政が必要となる。

(あべ なつまる、小説家)

子どもたちは夕暮れ近くになると、絶好のポイントに「捨て針」を仕掛けて川を後にしました。翌早朝、期待に胸を躍らせながら収穫に行き、そのまま朝釣りを楽しんだものでした。昼食もそこそこに、今度は水遊びに川水浴にと終日を川で過ごし、顔の表裏もわからない程に日焼けした真っ黒坊主のオンパレード。

大人たちは川で洗濯をし、採りたての野菜を洗い、川木（洪水による流木など）を拾い集めて薪として生活の足しにしていました。

“今日は川に入ったで風呂はやめだ”こんなことも通用したのが、今から五十数年前の矢作川流域での人と川との暮らしぶりでした。

その頃流域に、番傘と抹茶道具一式を背負ったさすらいの大将がいました。眼光鋭く、鼻筋がとおりに、長髪のくせ毛。そう、一見アルカイダのウサマ・ビンラディン氏を彷彿させるその人は、アルマイト製の大きな弁当箱を差し出して、「こんにちは、都合がよかったらメシを分けてくれんかね」こんな台詞で物乞いをして歩き、運良く食事に有り付くと必ず一飯の恩義に報いる為に野良仕事や屋敷内の草取りはもとより、大工・左官仕事まで器用にこなしてしまっていたものでした。

そんな彼の楽しみは、背負った抹茶道具でお

抹茶が飲めた川

倉地格

茶を飲むことのようにでした。近くで遊んでいる悪ガキをつかまえて、川岸の水はよごれているとの哲学から、泳いで行って川の中央を流れるきれいな水を葉缶に汲んでこさせ、素晴らしい腕前で茶を点て、恰も天下を取ったが如くうまそうに飲んでいました。

私たちは今、五十数年前の矢作川に思いを馳せ、“あの頃の清流を”を合言葉に「動植物と人が共存できる川」「子どもたちが安心して楽しめる川」を目指し活動をしています。

今日の川の汚れが人間の仕業ならば、人間の力で昔の姿に蘇生させなくてはなりません。「矢作川を生きた川にする」には、一人ひとりが何をすべきか、何をすべきかはいけないかを真剣に考え、身近なことから取り組んでいく必要があります。

その昔、人びとの暮らしは川と共にあり、四季の移ろいもまた川と共にありました。川への依存度が高くなり過ぎ、川が川でなくなってしまった今日の矢作川を見るにつけ、もう一度、抹茶の飲める川としてその清流を次代に繋ぐ為、子どもの頃に眺めた目と想いを大切に、川との結びつきと流域の交流をもっと深めていくように努力しなくてはと痛感しています。

(くらち いたる、アド清流愛護会 会長)



川で洗物をする女性（昭和初期 豊田市郷土資料館 提供）



久澄橋で遊ぶ子どもたち（昭和20年～30年 豊田市郷土資料館 提供）

ふっそ 古巣水辺公園における 鳥類の河川利用とその重要度について



モズ (古巣水辺公園にて 筆者撮影)

—古巣水辺公園は
鳥たちにとってどうなのか?—

猪狩敦史

一昨年、古巣水辺公園で鳥類の調査をさせていただきました。都会に近い公園なのであまり期待せずに公園へ出かけました。しかし、調査を始めると鳥がとても多いことに気が付きました。この公園には砂地や竹林、樹林帯、水域、草地などほとんど全ての環境が集まっているからです。砂地ではセキレイ類がカワゲラを食べ、樹林ではヒヨドリやエナガ、メジロが群れで休んでいました。水域ではカイツブリ、カモ類、カワウが魚を食べたり、休んでいて、草地ではホオジロやウグイスが思い思いに過ごしていました。河川に伸びる木の枝にはモズ(上の写真)やカワセミ、珍しいヤマセミの姿をよく目にしました。全部あわせると一年を通して67種類が出現したという結果が出ました。これは、「矢作川中流域の鳥類相」で調べられた中に記載されている128種のうち52.3%も見られていることになるのです。

特に地形の重要性と繁殖について重点的に調査を行いました。その結果、セグロセキレイ、カワガラス、ヤマセミなどの繁殖兆候(求愛給餌や幼鳥の確認)が見られ、ホオジロとコチドリは営巣が確認できました。この2種類の繁殖がいずれも中洲で観察されたことから、繁殖に重要な地形であることがわかれると思います。コチドリは地面に営巣するため、外敵の侵入のない中洲を選ぶことが多いので、繁殖期の4~7月に犬の散歩などの進入を抑制するとよいと思われます。

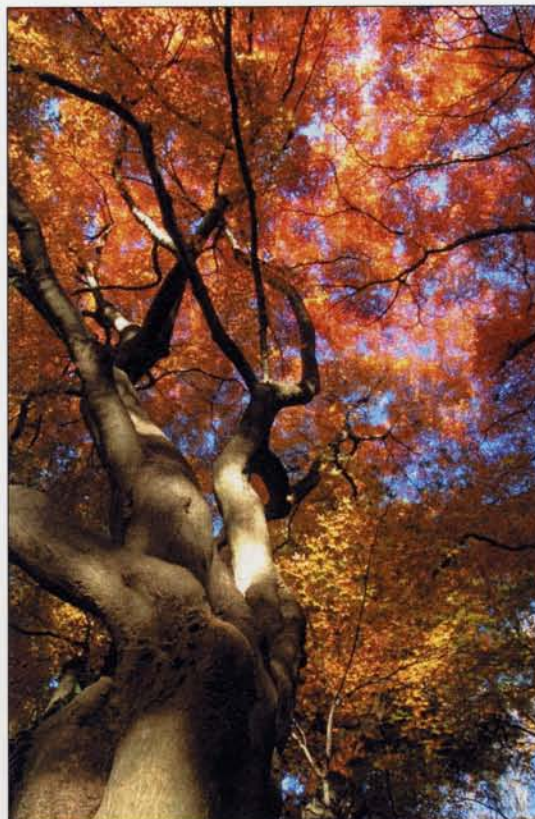
今回の調査では鳥類の個体数は秋の渡りの時期に最も多く、冬になると数が少し減るという結果になりました。秋冬の休息、採餌利用が急激に増えたため、この時期の役割が大きいのではないかと考えました。「回廊」と言われる生物の移動経路、すなわち「道」として機能、また越冬地としての機能

を果たしているようです。環境別の利用を見るとそれぞれに定着している鳥が住み分けているため、たくさんの種類が見られていることがわかりました。これらのことから矢作川中流域の古巣水辺公園の果たす役割は大きいと知ることができました。

古巣水辺公園の利用客(特にバーベキュー)がごみを捨てていくのを何度も目にしたのがとても悲しいことでした。時にはオムツや残飯を捨てていっていました。景観を汚している上に、鳥たちが残飯をつついていいため、生態系に負荷を与え、バランスを崩していることは間違いありません。この様なことのないようご協力をお願いいたします。

(いがり あつし、鳥類調査員)

足助町飯盛山の秋(二〇〇二年十一月十九日 吉鶴靖則撮影)



今月の一枚



第2回 かいぼり 大会



平成15年10月4日(土)に越戸公園前の矢作川で開催されました。絶好の秋晴れに恵まれ、小さい子どもから大人まで290名の参加者は網とバケツを持って水たまりに逃げ込んだ魚たちを楽しそうに捕まえていました。当日確認された魚種は21種と昨年の18種を上回りました。



学 小説家の阿部夏丸さんに魚の取り方や魚の特徴などを教えてもらいました。

テイクアウト
「おうちで飼うんだ！」と持ち帰る子もいました。



食べる 捕まえた魚はその場で素焼き、蒲焼き、唐揚げにして食べました。



研究所の 調査風景

一色町沖に偏っていることからアユにとって河口になんらかの問題がある可能性が指摘されました。(内田)

報告されました。調査後に復活した「民俗事例」が史実とは質的に異なっている事実を示しながら、その善し悪しを考える一方で、それも含め新しい歴史であるといった議論が印象的でした。矢作川でも様々な思いのもと多くの活動が続けられています。研究所としては、それらを記録し続け、その記録が、流域住民の方とともに流域の文化・歴史・環境を考える手がかりとなるように、整理公開していきたいと考えました。(小川)

10月2日(木)

第7回矢作川河口周辺海域アユ調査委員会が名鉄トヨタホテルで行われました。山本研究員が昨年秋から今年の春にかけての調査結果と今後の計画について発表しました。矢作川河口域における仔アユの分布は河口から同心円状に広がらず、東側の

10月5日(日)

山口大学(山口市)で開催の日本民俗学会第54回年会に参加しました。ミニシンポジウムやいくつかの自由発表では、神戸市、北九州市、京都府向日市などの事例を通して、住民自身がかつての暮らし(農法や祭、街並み)を調査、再認識する活動が

編集後記

第2回かいぼり大会に参加させてもらった我が家の娘は、その数日後、夢でもかいぼりをしたそうです。夢では矢作川のような川で大きなナマズのような魚を両手でつかみ、そいつをいつも使っているおもちゃ籠に入れ、そっとふたをしたそう。夢とうつつ、2度もかいぼりを楽しみとてうれしそうでした。(内)

ご意見・ご感想をお寄せください